観光ガイドマップ

中世・伊予市の歴史ロマン

「源平ゆかりの地」めぐり

平家一門を束ね、武家社会の礎を築いた
平清盛は瀬戸内海を中心に活躍しました
源氏と平氏の戦乱の歴史は壮絶を極め、各地に
源平ゆかりの伝説が数多く残されています
伊予市内においても、鎌倉幕府を開いた
源頼朝の弟・源範頼や木曽義仲の
側室・山吹御前をはじめとして
源平ゆかりの伝承が数多く残され
現在も多くの市民に愛され語り継がれています。
市内に残る源平ゆかりの地を探訪し
伊予市の歴史や魅力を発見しましょう

伊予市には、なぜ平氏や源氏にまつわる伝説が数多く残されているの！？

12世紀の中世社会は、院政のもとで天皇家にかかわる荘園をはじめ神社や寺院、貴族たちの荘園制を基礎とした時代でした。伊予郡には玉生荘（たまふ）・吾川保（あがわ）・神崎出作（しゅっさく）（石清水八幡宮）、山崎荘（稲荷社）などの荘園がありました。一方、荘園とならず伊予の豪族・在地領主たちが支配していた国衙（こくが）とよばれる公領地も多く分布し、越智氏やその系譜である新居（にい）氏・高市氏・河野氏など地方武士団が勢力を拡大していました。

院政期には、院政を支える武家である軍事貴族・源平両氏が台頭します。東国に地盤をもつ源氏に対して、平氏は瀬戸内を中心とした西国の院領荘園の管理や海賊討伐に功をあげ、平清盛は、日宋貿易をはじめ瀬戸内海航路を整備し、武家権門の雄に躍り出ます。瀬戸内の要の地であった伊予国も平氏の知行国となり、平治元（1159）年、清盛の子・重盛が伊予守となっています。

伊予郡は、在地領主であった高市氏一族が開発をすすめた地域であり、積極的に平氏と結びつく道を選びました。源平の戦いのなかで、反平氏の旗をあげた河野氏は高市氏の拠点であった三谷（みたに）館・吾川（あがわ）館などを襲撃し、やがて高市氏は平氏とともに没落します。「五色姫伝説」など平家衰亡の伝承には、こうした歴史的背景があります。

また平家滅亡後、源頼朝の命により義弟の範頼・義経によって滅ぼされた木曽義仲、頼朝に疑われ修善寺に幽閉殺害された源範頼。こうした源平合戦の悲劇をしのんで、木曽義仲の側室「山吹御前」、「源範頼伝説」などの伝承が伊予市に残っています。

おすすめ探訪コース

※　は午前（半日）コース　※番号は裏面マップ参照

若皇神社 ⑬ → 多喜寺跡 ⑫ → 本妙谷 ⑱ → 客池・三谷神社 ⑭⑮ → 鎌倉神社・称名寺 ⑪⑩ →
伊豫稲荷神社 ⑨ → 五色姫海浜公園 ❺ → 曳坂 ② → 山吹神社 ③ → 大地蔵の木地蔵 ⑧

観光・宿泊施設

手づくり交流市場　町家 Ⓐ

数寄屋風の建物で、飲食店等の店舗と農産物、鮮魚、加工品など伊予市の特産品がそろっています。

伊予市米湊827番地4　☎089-946-7245

ウェルピア伊予 Ⓑ

プールやテニスコート、野球場、体育館等が整備され、会議や研修会、宿泊もできる総合文化施設。

伊予市下三谷1761-1　☎089-983-4500

花の森ホテル Ⓒ

栗の里公園内にあり、宿泊、レストラン、フラワーハウスなどご家族・お友達・カップルで楽しめます。

伊予市中山町中山11号405番地2　☎089-967-1666

なかやま特産品センター Ⓓ

特産品センターでは、地元の名産品を一堂に取り揃えております。広々とした店内でごゆっくりお買い物をお楽しみください。

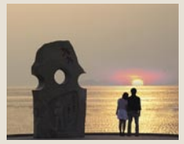
伊予市中山町中山丑173-2　☎089-967-1500

クラフトの里 Ⓔ

中山で遊ぶなら絶対ココ！木工体験道場やそば打ち体験道場など、家族や友達同士でふれあいながら楽しめます。

伊予市中山町中山子271　☎089-968-0756

ふたみシーサイド公園 Ⓕ



しずむ夕日が立ちどまるまち伊予市双海町にある道の駅。恋人の聖地にも認定されており、恋人岬等の人気スポットがあります。

伊予市双海町高岸甲2326番地　☎089-986-0522

■問い合わせ先

伊予市観光協会

799－3111
愛媛県伊予市下吾川1512番地6
（伊予商工会議所内）
ＴＥＬ　089－994－5852
ＦＡＸ　089－994－5865
e-mail　info@iyokankou.jp
ＵＲＬ　http://iyokankou.jp

ふるさと案内人ご利用案内（伊予市観光ボランティアガイド）

伊予市観光協会　☎089－994－5852

取次先

■手づくり交流市場 町家	伊予市米湊827番地4	☎089－946－7245
■ふたみシーサイド公園	伊予市双海町高岸甲2326	☎089－986－0522
■なかやま特産品センター	伊予市中山町中山丑173-2	☎089－967－1500

○予　約　制／原則7日前（但し、当日の申込についても可能な場合は対応します）
○案内時間／9:00～12:00　13:00～16:00（年末年始12月29日～1月4日は除く）
○利用人数／2名以上　団体の場合20名まで

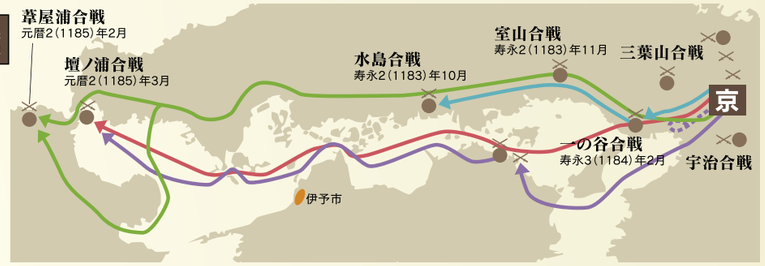
伊予市源平ゆかりの地

元永元（1118）年	平清盛誕生　父は平忠盛、母は白河上皇の女房	寿永2（1183）年	木曽義仲の攻勢により、平家一門、安徳天皇ら都落ち　義仲が伊予守になる
久安2（1146）年	清盛、安芸守になり、瀬戸内の制海権を掌握する	寿永3（1184）年	源範頼・義経が木曽義仲を破る
仁平3（1153）年	荘園制が広がり、高市氏による伊予郡稲荷社領山崎荘が成立		一の谷の戦いで、高市盛儀の子・清儀は平家方に加わる
平治元（1159）年	平治の乱　清盛、源義朝と戦い勝利　武士の頂点に立つ		河野氏が高市俊儀、甥・秀儀の三谷館・吾川館・鷺小山に攻め入る
	清盛の子・重盛、伊予守となる　平氏一族が伊予の国司に	文治元（1185）年	源義経、屋島の戦いで平家軍を敗退させる　河野通清の子・通信は義経の軍に参加
安元2（1176）年	平重盛の子・惟盛が伊予権介に		壇ノ浦の合戦で平家軍、滅亡　安徳天皇入水
治承4（1180）年	平重盛の子・清経が伊予介に		義経、伊予守になる　源頼朝、義経追討の院宣を与えられる
	源頼朝が伊豆で挙兵　木曽義仲が信濃で挙兵	建久3（1192）年	源頼朝、征夷大将軍となり鎌倉に幕府を開く
	河野通清は、頼朝挙兵の後、高縄城で反平氏の旗を挙げる	建久4（1194）年	源範頼、頼朝に疑われ伊豆に幽閉　修善寺で誅殺されたとされる
治承5（1181）年	清盛、熱病に倒れ死去	正治元（1199）年	源頼朝、死去

源平合戦

源平の軍の侵攻ルート

- 平家軍
- 源義経軍
- 木曽義仲軍
- 源範頼軍



…平家　…源氏

トピックス

木曽義仲の妻　山吹御前の伝説（中山・佐礼谷）

源氏の木曽義仲が兵を挙げて平家を四国に追いやり、京都に上洛してからは中央政権が義仲の勢力の下に置かれた。そして伊予の国司は義仲が任ぜられることになった。しかし寿永3（1184）年1月、義仲は同じ源氏の一族である頼朝の弟範頼や義経に追われて近江の国粟津が原で戦死してしまった。当時義仲の寵愛を受けた山吹御前は、義仲亡き後、従者とともに京都を出て知人を頼って伊予に逃れることになった。上灘の海岸にたどり着き、ひそかに山奥に忍び込もうと川沿いを上るうちに、大栄口あたりで疲労のため死んでしまった。従者たちは笹竹に乗せて山坂を曳き登り、佐礼谷の仁壬川のほとりに墓地を定めて葬った。この集落を山吹といい、曳坂という坂道、一夜の宿にした築楯の地名が残っている。

源範頼の墓で繋がった正岡子規と夏目漱石

松山市立子規記念博物館所蔵

上吾川鎌倉神社の裏手に源義朝の第六子である源範頼の墓がある。範頼は木曽義仲を追討し平家を破り、後に頼朝によって伊豆に流され処断されたという。大学予備門に在学中の正岡子規はこの墓を訪ね、漢詩を書いている。その後、夏目漱石も松山中学の英語教師赴任時にこの地を訪れている。「蒲殿のいよいよ悲し枯尾花」と「木枯らしや冠者の墓撲つ松落葉」を詠んでいる。神社の社殿左手前に句碑がある。また、伊豆の修善寺にあるもう1つの範頼の墓にも詣でて、それぞれが句を残している。子規、漱石の範頼びいきの奇縁である。

五色姫伝説と五色の石（伊予・五色浜）

「おごる平家久しからず」のことばそのままに、源氏に敗れた平家の五人の姫が砂浜に流れ来た。ある日、一番年上の姫が一匹の赤いカニを見つけ「まあきれいなカニだこと。おまえは平家のカニでしょう。それにつけても憎いのは源氏」と気が狂ったように叫び、四人の妹たちに「白い源氏のカニを探しておいで、私は憎い源氏のカニをふみつぶしてやるから」といい続けた。いいつけどおり毎日探したが見つかるのは赤いカニばかり。そのまま帰ることもできないので、相談の結果、赤いカニに白粉をつけて持ち帰ることにした。差し出したカニを見つめた姉姫はやがて気味悪い笑みを浮かべ、庭の手洗い鉢へ投げ込んだ。するとカニの白粉はたちまちとけてもとの赤いカニになってしまった。それを見た姫は一番末の姫に切りつけた。この恐ろしい有様に「もう帰ることはできない。三人一緒にこの海に沈んでお父様やお兄様のところへ行きましょう。」と暗い海の底へ沈んでいった。残った姉姫も海へ飛び込んだ。こうして亡くなった五人の姫たちが、それぞれ赤・緑・黄・黒・白と五色の小石に化した。五色浜には今も美しい五色の小石がある。

1 豊田の浜（とよた　はま）

源平最後の合戦である壇ノ浦の合戦で平家に身を寄せていた安徳天皇は、母・建礼門とともに神器を抱え海中に身を投ぜられた。

この幼帝の御遺骸が豊ヶ浦（豊田の浜）に流れつき、土地の人たちによって祀られたと伝えられている。

2 曳坂（ひきさか）

双海町上灘大栄口から東峰を結ぶ約2kmの山坂道である。山吹御前が従者らと逃げる途中で力尽き、その屍を束ねた笹竹に乗せて運んだことから「曳坂」と呼ばれるようになったとされる。昭和初期まで中山との主要道であった。

3 山吹神社（やまぶきじんじゃ）

山吹御前ゆかりの社である。明治25（1892）年に長州大工・門井友祐の手により建築せた。

また、神社の近くには山吹御前のものとされる五輪の塔があり、この辺りには「山吹」や「衣装替地」、「源氏」の地名も残っている。

4 蒲山城跡（かばやまじょうあと）

影之浦地区と栃谷地区の境の尾根で標高754mに残る中世城館跡。蒲冠者・源範頼が隠れ住み、貞永元（1232）年に病死したとされる。周辺には城主および武将の墓とされるものが数ヶ所残っている。今もなお、栃谷地区の人々が蒲山城跡で供養を行っている。

5 五色姫海浜公園（ごしきひめかいひんこうえん）

五色浜には平家の5人の姫君が身を投げたとする伝説が残っており、姫君の化身が五色の石となったとされる。

平家の赤は紅簾片岩、源氏の白は石英。緑は緑色片岩、黄は珪石、黒は安山岩。平家の家人・高市氏の没落と五色石を結びつけた哀話であろう。

6 八幡神社（水天宮）（はちまんじんじゃ　すいてんぐう）

壇ノ浦の合戦で入水した安徳天皇と母・建礼門、祖母・二位尼を祀っている。

平家一門の哀れな最後を悼んで、水天宮として祀ったと伝えられている。明治43（1910）年、この八幡神社に合祀された。

7 九門修理の墓（くもんしゅり　はか）

修理は源範頼の家来で、愛馬の虎月毛を範頼の死後も大切に世話していたが、終に病死した。

残されたと虎月毛は大平の野山を走り回っていたが、農作物などを荒らすことはなかったという。

後の世、馬に原因不明の病が流行ったため、忘れられつつあった修理の墓が整備されたという。

8 大地蔵の木地蔵（おおじぞう　きじぞう）

弓の名人・那須与一は屋島の合戦で、平家が船上に掲げた日の丸の扇をめがけて矢を放ち、見事命中させた。

この時、「願いが叶えば予州に仏像を供える」と願かけしたため、この地に木地蔵を祀ったとされる。現在、木地蔵は大洲の如法寺に移され、代わりに石地蔵が供えられている。

9 伊豫稲荷神社（いよいなりじんじゃ）

弘仁15（824）年、国司の越智為澄が伏見稲荷神社から勧請し、石田郷の総鎮守とした。

仁平3（1152）年に山崎保は伏見稲荷神社の荘園となったが、これには平家の家人・高市氏が関与していたとされる。平家没落後、弘安の役の功により河野通有がこの地を領し、河野家の祈願所とした。

10 称名寺周辺（吾川館）（しょうみょうじしゅうへん　あがわやかた）

元暦2（1185）年、高市俊儀は河野通信による三谷館襲撃を聞き、鷺小山にある吾川館に籠城するが敗れ、讃岐に逃れた。

その甥の秀儀は三谷館で戦死したとされる。この吾川館は、称名寺周辺にあったと推測される。

11 鎌倉神社と「蒲冠者範頼公墓」（かまくらじんじゃ）

伊予市には、源範頼が難を逃れて伊予の河野氏を頼って落ちて来たという伝説が残っている。古来、戦いの神として戦勝や武運長久の祈願にと多くの参拝者で賑わっていた。

延宝5（1677）年に訪れた大洲藩主の加藤泰恒は、裸足となりひざまずいて参拝したといわれる。

12 多喜寺跡（たきじあと）

平家の家人・高市氏の氏寺。一ノ谷、屋島、壇ノ浦での源平の合戦すべてに参加した、高市武者所清儀の遺骨を彫刻して仏像を造り、祀ったとされる。

「建治三年丁丑」（1277年）と刻まれた石造層塔の一部が残っている。

13 若皇神社（若一皇神社）（にゃくおうじんじゃ　にゃくいちおうじんじゃ）

源平の合戦に出た河野氏は、若一社の神力によって戦功をたてたとされる。

後に賊により社殿等が全壊したが、安検便で訪れた加藤嘉明が「高市の氏神で源氏代々の鎮守であるから捨て置くことはできない」と慶長7（1602）年に再建した。

14 客池周辺（三谷館）（きゃくいけしゅうへん　みたにやかた）

高市俊儀と甥の秀儀は平家方の阿波豪族・田口成良らに加勢し、高縄城の河野通清を攻略した。

元暦2（1185）年、子の河野通信は平家に加担した三谷館の秀儀を襲撃。秀儀は2百騎あまりで応戦するも敗れ、自害した。この三谷館は、客池周辺にあったと推測される。

15 三谷神社（みたにじんじゃ）

明治43（1910）年に若皇神社（若一皇神社）を合祀してから、神紋を若皇神社と同じ「歯朵に鶯」にした。

16 宝珠寺（ほうしゅうじ）

河野通信・通俊親子は平家を討つため宝珠寺で戦勝祈願を行った。その後、通俊は山を下りる途中で見つけた駿馬に乗って出陣し大勝を得た。

戦が終わり、通俊がこの馬を連れて戦勝のお礼に行くと、馬はお堂に掲げてあった絵馬の中に戻っていったという。河野家では宝珠寺を尊び、承元2（1208）年に伽藍を再建した。

17 上唐川の長崎谷（かみからかわ　ながさきだに）

長崎谷部落の奥地にある長崎谷には、平家の落人伝説が残っている。

この地より上の山中には、来襲する源氏の追手に備えてか、直径5m、高さ2mくらいの石で造った砦があったとされる。

18 大谷池の本妙谷（通称ウグイス谷）（おおたにいけ　ほんみょうだに）

平家の落人がこの谷に隠れ潜んでいたとされる。源氏の追手から逃れるため、シダの下に身を隠していたところ、シダの上のウグイスが鳴いたおかげで助かったという。このことから、家紋を「歯朵に鶯」にしたという伝説がある。

※高市氏の人物相関関係は重要文化財「予州新居系図」を参照した。